

氏名	たなかのりお 田中則雄
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第51号
学位授与の日付	平成8年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科国語学国文学専攻
学位論文題目	初期読本の研究

論文調査委員 (主査) 教授 日野龍夫 教授 安田章 教授 興膳宏

論文内容の要旨

本研究は、都賀庭鐘・上田秋成の作品に代表される初期読本の成立事情を、当時の文壇の思潮という背景との連関において考究しようとするものである。

第一章「近世初期の教訓意識と宋学——文学観の基礎にある思考をめぐって——」、第二章「載道」と「人情」の文学説——近世中期における小説観の展開——は、初期読本発生の基底となった小説観の成立の経緯についての考察である。

都賀庭鐘は『英草紙』序、『義経磐石伝』跋に自らの小説論を披瀝して、小説とは「俗の^{いましめ}徹」となる寓意を述べ、また「人情」を描くものであると述べている。一方恰も初期読本が成立した近世中期、漢詩文壇を中心に、文学とはいかにあるべきかについての議論が盛んに唱えられていた。そこで展開された論は要するに、“文学は「道」(思想・倫理)を述べるものである”(論文中では「載道説」と称する)、“文学は人間の情を述べるものである”(同様に「性情説」と称する)という、二つの主張に集約される。即ち庭鐘の論は、当時漢詩文壇を中心に行われていた議論を基本的に踏まえながら、それを小説論へと発展させたものと考えられるのである。

前記の漢詩文壇における論は、表現の上では中国古来の伝統的な儒教的文学論そのものというべきであり、また同種の発言は近世初期においても既に見られる。しかし当該の近世中期の論においては、初期と同様の表現に拠りながらも、文学に対する新たな理解が生じているように窺える。即ち「載道説」に関しては、「道」を、単に文学中に延べられた道徳的教訓と見なす思考から脱して、人間が複雑多様な現実に対応していか生きるべきかという指針の如きものとして捉えている。また「性情説」に関しても、単に文学は人間の心情の表現であるという大前提の確認にとどまらず、人間の根本的、究竟の情とはいかなるものであるか、という追究を行うところまで理解を深化させている。

さて前述の如く、当該の論は伝統的な儒教的文学論の表現に拠っており、発言の表面のみを見れば近世初期に述べられた論と何ら変わらないということになる。そこで第一章で一旦年代的に遡って近世初期の

論を検討し、然る後に第二章ではそれと対比しつつ近世中期の論の特質を論ずる。かくして近世中期の論に至って、述べた如き新たな理解に到達した、その経緯を跡付けようとした。なお第一章で教訓の書における宋学を受容という現象について取り上げたのは、この現象を通じて、当時の文学観をも規定している基礎的な思考のあり方が顕著に窺えると考えたからである。それは恰も第二章で、近世中期の文学論をその基礎にある儒学思想との連関の中で捉えようとした点と対応する。

第三章「初期読本における「信義」の主題——庭鐘・秋成作品を中心に——」、第四章「京坂における白話小説の流行——『剪燈隨筆』のことなど——」は、初期読本作家とその周辺の人びとによる中国白話小説受容についての考察である。

近世中期に至って末期的頹廢を呈していた浮世草子に飽き足らぬ人びとの間に、新しい小説を望む気運が高まり、中国白話小説愛好の風潮を生み、更に、それを範とする初期読本が文壇に登場するに至った。従って初期読本作家とその周辺の人びとが、白話小説のいかなる点に殊に関心を寄せていたかを明らかにすることが不可欠となる。ここでは主として、初期読本作家が、白話小説に頻出する「信義」「俠」などの主題に留意し自作中に取り上げたことを論ずる。

第三章では、庭鐘と秋成が共に「信義」という主題を作品化していることを問題にした。両作家が「信義」を取り上げた契機は、『水滸伝』『三国演義』などの白話小説の読書を通じてこの主題に触れたことにあると思われるが、実際の作品においては、各々独自の関心に基づいて問題を追究している。秋成が「菊花の約」（『雨月物語』）で描いた丈部左門・赤穴宗右衛門の「信義」とは、相手に対する惻隱、哀憐の情に基づく、言わば情誼的結合であったと解される。また、この問題に対する秋成の関心は「青頭巾」（『同』）においても認められる。一方庭鐘は、「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿となる話」（『英草紙』）他の諸話において、情誼的結合にはよらぬ、相手の人格そのものへの畏敬、信頼に基づく信義のあり方を取り上げている。

第四章では、秋成青年時の俳友勝部青魚の『剪燈隨筆』に見られる白話小説の論評の中から二つの条を挙げ、それに即して、初期読本作家とその周辺において、白話小説の特質に関していかなる認識がなされていたかという問題を考えた。

いま、末期浮世草子には見られず白話小説にも備わる特質を挙げてみると、話の構成が緊密であること、作中人物の性格付けが明瞭であること、人生有意義な思想（寓意）を備えること、人物の心情描写に意を用いていること、などとなる。ここで第二章で論じた如く、京坂の白話小説家とその周辺の人びとにも「載道説」「性情説」の主張があったことを考えると、かかる人びとにおいては、白話小説に備わるこれらの要素は各々独立的な関係にあるものではなく、詮ずるところ、人生有意義な思想（寓意）を備えること、人物の心情描写に意を用いることの二点に収斂されると理解されていたのではなかったかと思われる。換言すれば、「人間の生き方を描く」という大きな動機を發して、構成も性格もそのことに参画してくる、ということではなかったかということである。論の前半ではこの点を、『剪燈隨筆』の論述に沿って、また当時の人びとが中国白話小説に倣って創作した白話小説を分析しつつ、跡付けようとした。また後半では、初期読本作家とその周辺の人びとが中国白話小説に見られる、動ずることなく自己のなすべきところを貫徹するという人間像に関心を寄せていたことを問題にし、それが庭鐘が「江口の遊女薄情を憤りて珠

玉を沈むる話」(『繁野話』)に取り上げた「俠」というテーマとも通ずることを論じた。

第五章「都賀庭鐘の読本と寓意——「義」「人情」をめぐる」、第六章「上田秋成と当代思潮——不遇認識と学問観の背景——」は、言わば初期読本作家各論であるが、何れも当時の思潮との関連において作家の基本的思考の特質を捉えようという意図によっている。

第五章では、先に第二章で述べた如く当時の文壇の文学観に基づくとと思われる庭鐘の小説観が、その実作品においていかに実践されているかを辿ろうとする。前述の如く庭鐘は『英草紙』序に、自作は「俗のいましめ傲」となる寓意を述べたものであることを言い、この寓意を「義」と称している。かくして実作品を見ると、自己の鬱憤を晴らすために「世の安寧」を損なってはならぬという主張を、庭鐘が再三にわたって述べていることに気付く。これは当時、赤穂浪士論争、荻生徂徠の安天下の論などを通じて論じられてきた問題と関連するものと思われる。ここから、第三章で検討した「信義」に関する捉え方をも踏まえて考えると、庭鐘の思考は、個人の怨恨、鬱憤などを超えた、より大きな、普遍的な正義とは何かという問題へ向けられているように思われる。また一方で庭鐘は、小説は「人情」を描くものであるとの論をも述べていたが、この「人情」は「義」の背反のものと理解されていたのではなく、逼迫して道義にすすむところに人間の究竟の人情が見て取れる、というのが、庭鐘の「人情」論であったと思われる。

第六章では秋成に関して、浮世草子作家時代から晩年に至るまで一貫して見られる不遇というテーマの追究、また晩年における独特の古代観、学問観の形成を支えた思考の特質について論じた。近世中期、老荘思想が一種の流行現象を呈し、同じく大阪の町人学者である田中友水子の教訓談義本などにも、老荘思想に基づく論理が取り入れられていた。また周知の如く賀茂真淵の国学思想も、老荘の自然随順論の影響を受けたものであった。かくしてこのような状況のなかで創作活動を開始した秋成の思考にも、かかる思潮との関連が見出されることを述べた。即ち秋成は、才行正しき人間に不遇をもたらす所以のもの、また、可視的な古文獻の奥にある真の古代像なるものにこだわり続けたが、このことは、論敵本居宣長から、「理をもて見る」ものと批判された秋成の思考に由来するものと思われる。またその思考には、老荘思想に見られる、善悪・美醜などとの対立を超えたところに真に拠るべき「道」があるとする論と通ずる部分が認められる。

以上述べた如く、初期読本作家は、小説とはいかにあるべきかという基本的見解を述べ、あるいは自らの作品に取り上げる主題に関して分析・解釈を行うなどに際して、当時の文壇の思潮の中で培われてきた思考の方法に拠る所を求めたものと思われる。特に本研究で中心的に扱った庭鐘と秋成に関しては、そのことが顕著に窺えるようである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世中期、低迷する浮世草子を駆逐して興った新しい様式の小説、都賀庭鐘・上田秋成などを代表的な作者として京坂で発達した初期読本について、成立の経緯と文学的特質を考察したもので、全6章から成る。

読本は、作者による作風の違いはあるものの、人間の真実を描こうとする真摯な意欲と、それに見合った謹直な文体とを共通の特徴とする様式である。論者は初めの2章において、近世の小説のほとんどが読

み捨ての娯楽の提供という低い意識に基づいて書かれた中であって、読本作者たちがこのような高い志を持ち得た理由を考察する。論者によれば、読本作者たちを支えたのは、儒学の伝統的な文学観として、特に朱子学において重視された、文学は道を伝え、性情を養う器であるという、載道説・性情説である。

朱子学の文学観はすでに幕初以来行われ、文学としては高く評価されるべくもない数々の教訓読み物を生み出していたが、論者は、近世中期の朱子学系の文献を広く見渡して、幕初の朱子学と同じ術語を用いつつも、載道説・性情説の内容がまったく異なったものとなっていることを論証した。たとえば都賀庭鐘の周辺の人柳沢淇園の「文説」に「文は誠を以て主となす」と旧来の載道説に似た主張を掲げながら、実例として諸葛孔明の出師表と並べて、純然たる私情を述べた項羽の垓下歌、荆軻の易水歌を挙げていることが示すように、道はもはや偏狭な道学主義から解放された、「人間の本情」とでも称すべきものととらえられており、その点で載道説と性情説は新しい融合を遂げているとする。

近世中期の思想史を検討する場合、幕初の朱子学者と同一の術語によって思考を展開する朱子学派は、新しい儒学説を唱えた徂徠学派に比べて、守旧派として軽視されてきたが、論者は術語の同一に惑わされずに朱子学系の学者の著述を精査し、その言説の中に新しい文学観の萌芽を見出して、それを初期読本の作者たちの創作意識の根拠に想定した。この着眼点は、近世の小説のうち唯一、知識人が手にして恥ずかしからぬ読み物であることを目指した読本の本質を衝くものであろう。

ただ、創作意識の枠組みを朱子学から借りている限り、読本は、舞台が江戸に移ってからの代表的作者曲亭馬琴の場合が示しているように、真摯であろうとすればするほど教訓性が過剰になる危険を常にはらんでおり、その傾向は初期読本の創始者ともいべき都賀庭鐘にすでに現われている。論者が、中期朱子学のプラス面のみを説き、この問題点を指摘しないのは、足らざるところとして批判されなければならない。

他の4章は、主として都賀庭鐘の作品を分析して、以上に見てきた新しい載道説・性情説の実際をうかがおうとするものである。たとえば『義経磐石伝』では、常盤御前が夫源義朝の仇敵である平清盛の妾となる話に取り上げられる。常盤の再縁は、貞女二夫に見えずの道徳に照らして近世の小説・演劇においては決して肯定されず、近松の『平家女護島』では、常盤は清盛に従うと見せかけて、実は源家再興のため密かに徒党を集めていたなどと設定されて、常盤を不義の汚名から救済しようとする。

庭鐘は、常盤が清盛の寵に応じたのは老母と三人の幼児を救うための正当な行為であったと肯定する。論者はこれについて、家族を守らなければならないという非常事態の前に、貞操が「私の意地」（原作中の言葉）として退けられたものとし、動機の純粹性に固執して複雑な事態に対応できない道学主義よりも、人間的判断が優先されていると論ずる。

庭鐘の作品に倫理規範を機械的に適用できない複雑な状況の設定が多いという論者の指摘は鋭く、その設定を通して、道学を超える人間的価値の実現が求められているという主張も、秋成論の盛行に押されて、論ぜられることの少なかった庭鐘の文学を解明する上で大きな意味を持つであろう。

しかし、秋成と比較して、私的価値を公的価値から明確に分離し得ているとは認めがたい庭鐘においては、道学を超えるものとして求められた価値が常に人間的であり得るとは限らない。『義経磐石伝』における常盤の選択も、作品の究極においては、『平家女護島』のように直接的ではないにしても、源家再興

という必ずしも人間的ならざる価値に吸収されていると解することも可能なのであるが、論者はこの点には目を向けようとしない。本格的な作品論のほとんどない庭鐘に取り組み始めたばかりの論者に、万全の論を要求するのは過酷であろう。本論文の到達点を踏まえて、論者の庭鐘論がさらに掘り下げられることを期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1996年1月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事がらについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。